

# イノベーションをいかにして

代表取締役 鈴木英介

ない。これが評判を呼びスーパーカブとなる。世界のホンダはここから始まった。

また現在、世界の物流の過半はコンテナによってなされている。コンテナ以前は、バラ積みした船から陸の倉庫に物資を入れ、そこからトラックなどで各地に運んだ。これをコンテナに入れて荷を出すことなく最終目的地まで流通させる。そのため、積み下ろしの港湾荷役、沖仲仕の仕事がなくなった。そして積み荷の汚損や紛失もなくなった。人手がいらないので圧倒的に流通コストは下がった。

イノベーションを経済の用語として定式化したのは、オーストリア出身の経済学者ヨーゼフ・シュムペーター(1883-1950)だ。シュムペーターは著書の中でイノベーションを「生産手段や資源を新結合する事」と定義づけている。つまり結合を変えるのである。それは新技術でなくともよいし、新発明でなくともよい。その過程を「創造的破壊」と言っている。また新結合は「単に古いものにとって代わるのではなく、これと並んで現れる」と言う。そして「鉄道を建設した者は一般

「イノベーション」。多くの人が聞いたことがある言葉だと思ふ。しかしその意味を説明できる人は少ない。私も周りの人に聞いてみる。「技術革新では？」と答える人が多い。しかしこの答えは厳密に言えば間違いだ。かつて経済産業省が通産省だったころ、経済白書にイノベーション(技術革新)と記載したことから広まったらしい。技術革新もイノベーションの一要素にはなるが、そのものではない。訳としては誤りであろう。経済学の概念と考えると、言葉は慎重に使いたいものだ。

た。専門化により仕事の効率は上がった。

しかしそれはビル所有者にとってのイノベーションであらう。ビル管理会社にとってのイノベーションではない。ビル管理の仕事は日本では約60年前に始まり、今でもほぼ同じことをやっている。その光景は半世紀前と驚くほど変わらない。変わったのは機械警備と樹脂ワックス位だろうか。

今、絶対的な人手不足の中で、私たちを取り巻く環境も大きく変わってきた。人手が安いとき、どのようなやり方でも結果は変わらない。労働力の争奪戦が各産業界で始まる。人手をかせない保守管理が求められる。

多くの人は、サービス産業では製造業のように生産性の向上ができないと言う。人手でやる仕事だからだと言う。そして受注生産のため生産量は定量だ。いくら良い仕事をして受注金額が

クレーンが林立する。そのわきにはコンテナがビルのように積みあがる。港に付き物の倉庫さえ無用となる。イノベーションとはこのような事をいうのだ。

それでは我々の置かれている環境はどうか。ビルメンテナンス業ができた60年前は、この仕事そのものがイノベーションであった。

旧来、ビルの所有者がメンテナンスを行った。そしてその本業に関わりのない仕事を分離、外部委託していくようになる。ビル清掃、警備、受付、事務や給食など、それがその会社にとってイノベーションであった。

ビルは経済活動、生産の場として必要なものである。しかしそのビルを維持管理する事はその組織にとっては別の事である。ビルの建築を建築会社がやるように、ビルの維持管理はビル管理会社がやるようになって

コンテナと言う箱自体はかなり前からある。それを世界の物流に結びつけたのは最近の事だ。コンテナは世界的に標準化され、コンテナトラック、コンテナ列車、コンテナ専用船ができ、コンテナふ頭ができた。

私たちがスーパーへ行けば地球の反対側のチリ産ワインが手ごろな価格で手に入り、アフリカの魚介類やコロンビアのコーヒ豆と世界中の商品が安く手に入るのもコンテナのお陰だ。

衣料品では糸を作る国、それを織り布にする国、裁断し服に仕上げる国とコンテナに積まれ世界を駆けまわっている。国際分業はコンテナなしでは語れない。港へ行けばコンテナ用巨大

